

---

# 優しい依頼

yoshina

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優しい依頼

### 【Nコード】

N4338G

### 【作者名】

yoshina

### 【あらすじ】

「彼女」が大人の姿に戻って十年後。再び東京の地に立った、彼女の元に現れた意外な人物とその目的とは。しみじみ系。

ひっそりとしたバーのカウンター席一番左端。

赤みがかった茶髪の女は、右手に持つグラスをからんと傾けた。中の満月のような氷が揺らぐのを眺めながら、左手で頬杖をつく。

東京に来たのは久しぶりだった。

もう十年ぶりくらいだろうか。

『あの時』はここに帰ってくるなど考えてもいなかった。

だが、親交の深いある研究会の発表が東京で行われることになり、やむを得ずイギリスから飛行機に乗ってきた。

発表は今日と明日である。

一日目を終えた彼女は、部屋を取ってあるホテルにすぐ戻る気には何となくなれなかった。

かと言ってウィンドウショッピングという気分でもなく、うろつろしている内に、ホテルの近くの地下のバーに立ち寄っていた。

ジンベースのカクテルをもう一口飲み、テーブルにグラスを置く。いつもに比べ、自分の頬が少し温かくなっているのを左手で感じる。

もう酔ったのかしら

普段ならこれくらいで酔うことなど無い。

自分にとっては色々な意味を持つ地に戻ってきたことが、自分を酔わせてるのかもしれない。

そんなことを思いながら、目の前のチーズの盛り合わせに手を伸ばそうとすると、一つはさんだ隣の椅子が引かれたのが音でわかった。

カウンター席には左端の自分と右端の老人しかいない。

その間には五つの席がある。

わざわざ自分の近くに座る人間が気になって、視線をそちらに移した。

そして彼女は、滅多に無い驚きに襲われることになる。

偶然？ それとも故意？ 何故ここにこの男が？

様々な想像が頭の中に巡り、酔いは一瞬で冷めてしまった。

「一週間前、ベルリンにいた方ですか？」

はつとして、彼女は視線だけではなく顔自体を男に振り向けた。

名前ではなく、所在地で聞かれたことに違和感を覚えたが、それ以上にこの男が何故ベルリンでの研究会の会合を知っているのかが気になった。

確かに一週間前、比較的大きな会合に参加した。

世界中から研究者が集まる会合だったので、一科学者に過ぎない自分など埋もれているに過ぎなかった。

この道の専門家でもない、全くの畑違いの職業の彼が、そんなイベントを知っているのが意外だった。

「……人違いじゃない？」

しかし、口に出た言葉は本心を抑えるものだった。

先ほどまでの焦った表情を消し去り、いつもの無表情に戻る。

その返事に男は何の反応も示さず、寄ってきたマスターにビールを注文する。

上質な泡が盛られたそれが出されるまでの間、二人は無言だった。目の前に来たビールを片手に取り、男はそこで続きを始める。

「いや、あなただ。ツテを使って画像を確認させてもらいましたからな」

「何を確認したのかしら」

画像という単語に、あくまでも人違いである前提で彼女は男に聞く。

男はビールを煽り答えた。

「あなたは気付いてないでしょうが、あのベルリンでのイベントを日本のテレビが報道したんですよ。まあ、報道したと言っても五分ニュースに出てきた一分間足らずでしたがね」

そこに自分が映っていたと言うのだろうか。

聴く立場として参加しただけなので、目立つことなど一切無かったはずだ。

女の疑問を予測したかのように、男は言う。

「大ホールの聴衆が画面に映った一瞬でしたよ。『彼ら』はその一瞬だけでああなたを見つけたんです」

「彼ら？」

「ええ、彼らです」

意味ありげな台詞だった。

その意味に、彼女はあ一つの推測を立てる。

「……まさかあの子たちが……」

思わず自分があの場にいたと認める発言をしてしまう。

しかし、それ以上に『あの子たち』の懐かしい顔が彼女の心を震わせてしまった。

十年経った今でも決して忘れはしない、懐かしい懐かしい顔。

自分の記憶の中の彼らはまだ小さかったが、今ではきつと立派な顔つきになってるに違いない。

「私は依頼を受けましてね。あなたを連れてきてくれと」

全てが終わったあの時。

自分は元の姿に戻り、彼らの前から姿を消した。

同じように元の姿になった少年は、その行為を黙って受け止めてくれた。

なぜなら、自分は逃げたわけじゃない。

ただ、元に戻ってわからなくなったのだ。

この姿で何を、どうすべきなのか。

だから、消えた。

時間が必要だった。

しかし、彼らは突然居なくなった友達のことを勿論気にしただろう。

悲しんだかもしれない。

それでも、時がたてば小さな悲しみなど薄れていくはず。

自分とは違い、純粹で心優しい彼らのことだ。

すぐに新しい遊び仲間を見つけて、自分を忘れる。

そう思っていた。

なのに、彼らは。

「……さっきも言ったけど、人違いよ。確かに私はベルリンにいたけれど、あなたのいう『彼ら』が推測する人物とは違うわ」

グラスをきつく握り締めた。

そして耐え切れず顔を俯かせる。

違う、違うのだ。

もう自分は、あの子たちと一緒に居た子供ではないのだ。

少年探偵団と名乗りはしゃぐあの子たちが、無理やり引っ張っていった少女ではないのだ。

私は灰原哀ではないのだ。

黙り込んでしまった彼女を横に、男は呆れた風にため息をつく。胸元のポケットから煙草を取り出し、その一本に火をつけた。ライターを灯してから煙をふかせるところまで、ゆっくりとした仕草だった。

揺らめく煙を辿り天井を仰いで、男は妙に気の抜けた言葉を発する。

「まあ、それは俺もわからねえがな」

「え？」

彼の呟きに、女は顔を上げる。

「あなたがあの小生意気でいつも欠伸していたマセガキがどうかは知らないが、今はそんなこと関係ないんですよ」

少し意地の悪いジョークを交えつつ、男は彼女のほうを向いた。

「私は依頼されただけなんでね。」あのテレビに映った女性を連れてきてくれ」と

女がその真意を理解するまでに、少しだけ時間がかかった。

目を丸くして、わかった後は、その日本人ではない目の色を震わせた。

「これは私の推測ですがね。彼らにとってあなたが何者かや名前な

んで関係ないんですよ。ただ、テレビに一瞬映ったあの女性に会いたい。その願いだけなんだと思いますよ」

男はまだ長さの残る煙草を灰皿に押し付ける。

そして二人分の代金をテーブルに置いた。

席を立ち、彼女の目の前に一枚のカードを滑らせる。

阿笠博士と書かれた名刺だった。

恐る恐る、彼女はそれを手に取る。

その裏には、明日の日付と時間と、三人の名前が手書きで記されていた。

研究会の発表が終わる頃を想定した、指定時間だった。

じっと手書きの名前を見つめる彼女をよそに、男はきびすを返す。

「私……」

女が咳き、男が一步踏み出そうとした足を止める。

グラスの代わりにきつく持つカードを見下ろし、彼女は尋ねた。

「私、あの子たちに何て挨拶すればいいのかしら」

男は肩をすくめ振り向かないまま答える。

「さあな。久しぶりか初めましてか……まあ、さつきも言った通りあいつらにとつてそんなことは全然重要じゃねえと思うがな。いっそ”こんにちは”でもいいんじゃないかねえのか」

そう言い残し、毛利小五郎は静かに店の扉から出て行った。

扉が閉まるのと同時に、備え付けのベルがチャリんと鳴った。何かを察して中に消えていた初老のマスターが、再びカウンターに出てきて代金を仕舞う。

そして彼女のすっかり生温くなったカクテルを静かに引いた。

冷たい水がグラスに注がれる間、女はずっと名刺を見つめていた。丁寧にグラスが側に置かれ、彼女はそこでやっと視線をそちらに移した。

水を手に取り、ぐいと喉に流し込む。

体中に冷たいものを感じながら、口を離し、長くて細い息を吐いた。

男も見上げた天井を同じように仰ぐ。

声には出さないで、小さく口を動かした。

こんにちは。

実際に口にすると思った以上に自然な感じがして、溢れる感情が止まらず彼女は目を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4338g/>

---

優しい依頼

2010年10月17日00時22分発行